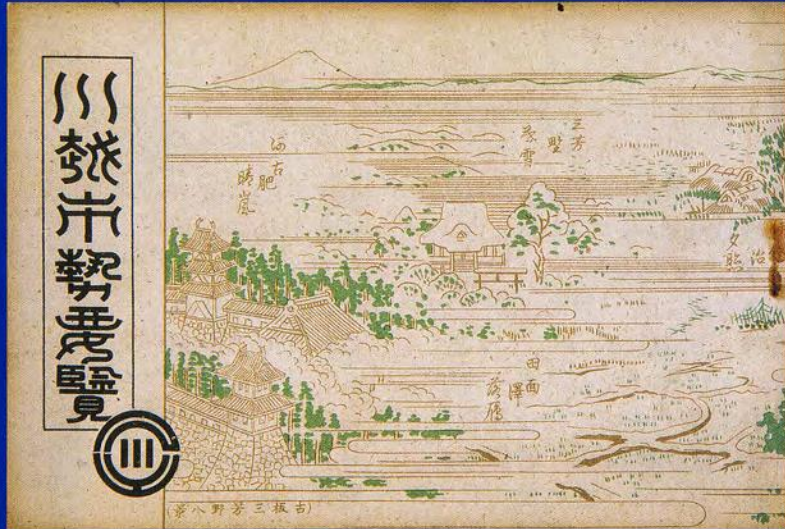




# 博物館だより



表紙



裏表紙

## 三芳野八景

この三芳野八景図は、昭和16年（1941）の『川越市勢要覧』の表紙に掲載されたものです。画中には八景として、河古肥晴嵐、三芳野暮雪、田面沢落雁、伊佐沼夕照、琵琶橋秋月、無量寺晚鐘、小仙波夜雨、扇河岸帰帆の文字が添えられています。これらの題目から、三芳野八景は中国の瀟湘八景にならって作られたことがわかります。

瀟湘とは、中国湖南省の洞庭湖に注ぐ二つの川、瀟水と湘水の合流点付近をいいます。ここは自然の景勝地として知られ、詩歌や絵画の主題として取り上げられてきました。その瀟湘の風景を八つの題目にまとめて「瀟湘八景」が成立したのは、11世紀頃といわれています。この時選定された題目は、瀟湘夜雨、煙寺晚鐘、遠浦帰帆、山市晴嵐、洞庭秋月、平沙落雁、漁村夕照、江天暮雪でした。

瀟湘八景の題目は、わが国にも室町時代の頃詩歌や八景図として伝来し、以後これにならった風景八景の詠歌や絵画の制作が行われました。とりわけ近江の琵琶湖周辺の景勝地を、瀟湘八景にならって選んだ「近江八景」が成立すると、全国各地に八景と名づけるものが登場しました。

川越では、江戸の俳人立羽不角（1662～1753）が著した紀行文『入間川やらずの雨』に、「入間八景」が載っています。入間八景は、川越に転居した不角の門人山東朋角が句に詠んで飾っていたもので、その題目は入間夜雨、高沢乱蛩、氷川青田、蓮馨晚鐘、天神夏月、仙波清水、行伝実桜、川越瓜市でした。ここに掲げた三芳野八景の成立は不明ですが、明治12年（1879）に清元「みよしの八景」が作られていることから、両者の関連性が窺われます。

# 橋本雅邦

## 「画宝会席画筆記 附起源一」

### 記録について

小泉 功

この記録を認めたのは、川越の初代町長を務めた岡田秋業氏である。彼は弘化4年(1847)9月14日陸奥国棚倉(現、福島県棚倉町)に生まれた。慶応2年(1866)棚倉藩主松平周防守康英が川越藩に転封するに及び、川越に転住してくる。明治2年(1869)には、大学校(元の昌平坂学問所)に学んでいる。明治19年(1886)には連合戸長に任ぜられ、明治22年には初代町長に選出されている。明治26年の川越大火では、自宅焼失にもかかわらず、自ら陣頭指揮を振るい、特に一番街の蔵造り商店や時の鐘などの再建を関根松五郎棟梁らに依頼し、今日の重要伝統的建造物群保存地区の基礎を築いた功労者である。

先ごろ、秋業氏の孫に当たる上福岡市在住の岡田隆男氏宅から、約B5判、26頁手書き「画宝会席画筆記 附起源一」なる和綴じの記録が見つかった。

近代日本画の元祖で、明治画壇の巨匠橋本雅邦と川越の人々との深いかかわりを示すものである。今回は紙数の都合もあるので、その記録の要旨を記し、若干の見解を加えることにした。なお、読解の便宜上、適宜句読点及び濁点等を付け加え、漢字は現行字体に改めた。

同記録の始めに「先生橋本雅邦氏ハ旧川越藩主松平周防守の士臣にして、養邦橋本氏の養子なり。先生ハ幕府の御絵師狩野勝川法印の家に生れ」とある。天保6年(1835)7月27日江戸木挽町4丁目狩野勝川法印の家で誕生している。(なお、養邦の養子とあるが、多くの資料では実子となっている。或いは記述に混乱があるか)

橋本家は代々画道をもって松平周防守家に仕える藩士であった。「時の藩主寛隆公(10代康爵)、先生の材幹非倫なるを愛し、更ニ藩費を扶持して狩野家に入れ(中略)」。棚倉藩主康爵より藩費が支給され、狩野家に弟子入りし画業に専念することになった。少年時代からの友人小林成允氏は「先生ハ歳僅二十二三、常ニ筆硯を離れず常ニ事象を写し物体を写す。当時既ニ技の観るべきもの多し」と言っている。更に「先生謹厚誠励錬磨遂ニ

克ク蘊奥を探り妙処を極、画作の泰斗を以て一世ニ賛頌せらるゝに至る」とある。先生は謹み深く、画道に対し誠励錬磨し、奥義を極め世に賞賛される人になられたのである。

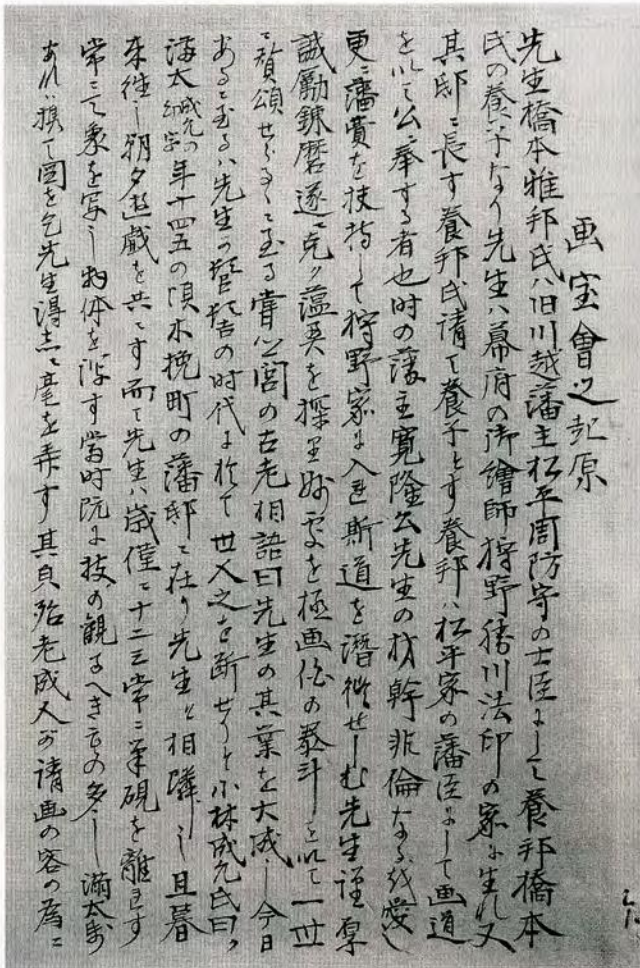
また、將軍家茂が「大坂城ニ薨ず。古礼ニ徳川將軍の薨去あるや必ず肖像を京師ニ奉ず。是れ幕府命を狩野法印ニ下して凶せしむ。再び却下せらる。先生代に筆し始て嘉納せらる」。14代將軍家茂が大坂城で死去した。幕府は最初狩野法印に肖像画の製作を命じたが、その出来映えは幕府に容れられず、雅邦が代作したところ、ようやく納められた、とのことである。

かつて芝御殿(現、旧芝離宮恩賜庭園)・浜御殿(現、浜離宮恩賜庭園)の装飾も法印が命じられ、先生こと雅邦が描くことになった。「先生の名頓ニ内外ニ普ク、人々其才を称す」とあり、雅邦先生の画才は内外で高く評価されるようになったのである。「先生の名聞荐ニ高ク、揮毫を乞者門ニ満ち、容易ニ企望を達する能はず」と、多少の誇張はあるがこの様に記されている。

明治28年(1895)5月に岡田秋業氏は、川越藩の家老であった一族の岡田千秋氏に画宝会の計画を打ち明け、雅邦先生の考えを打診してもらうことを依頼している。後日会則まで草し同氏に渡している。しかし、残念ながら千秋氏は病により他界された。明治30年7月に至り、嗣子元熙氏に引き継がれ、雅邦先生に企望が伝えられた。「先生曰、川越ハ吾ガ旧廬也。交誼親然必其需ニ応ぜん。其会同ハ月一回とし、会日必ず出席し画訖を為さん」との報を元熙氏から秋業氏のところに知らせてき



川越初代町長 岡田秋業氏



「画宝会席画筆記 附起源一」

た。早速秋業氏は、渡辺政方・綾部惣兵衛・黒須博吉の三氏に知らせ快諾を得ている。

ここに於いて、明治30年（1897）7月17日を期して、東京上野不忍池畔にある長酩亭で会合することになった。中井尚珍氏を中心にして東京に赴き、「予（秋業）ハ先生ヲ其邸に訪ひ、他諸子先長酩亭ニ向ひ先生を待てり。」「其日予の先生ニ遭ふや、先生先ツ曰ク、郷閭の庶子予（雅邦）の拙技を顧ず遠路出会し、殊に予をして幽邃の地ニ誘き饗せられんとす。太だ過遇に似たり。自安する能ハズと謙遜（中略）」。

雅邦先生は郷閭の人々が遠路を顧みず会に出席し、雅邦の拙技の絵画を求めてくれるのは極めて喜びとすると謙遜されていた。

なお、当時画宝会の幹事として名を連ねたのは、本資料の筆者岡田秋業氏のほかに、中井尚珍・渡辺政方・綾部惣兵衛・黒須博吉の4氏である。中井氏は元川越藩士で、岡田氏の後の町長を務め、また川越商業会議所理事長でもあった。渡辺・綾部・黒須の3氏も、川越の有力商人層に属し、町政に影響力を持った人々である。

この会合に出席した川越の諸士に頒布された雅邦先生の作品は、次の通りである。

岡田秋業	蓮池の鷺(聯落) 柳下釣魚(半折) 漁夫網引(額面) 水辺群鳥(式歩)
中井尚珍	蘆達摩(聯落) 竹二雀(半折) 阜頭鷺(式歩)
綾部惣兵衛	猿猴掬月(聯落) 鶴鴿(半折) 芙蓉岳(式歩)
渡辺政方	靄稚松(聯落) 聯(右瀑布 左蓮二蛙) 柳蔭漁夫(半折式歩) 瀑布(額面)
黒須博吉	山水(聯落) 蘆雁(半折) 蓮(式歩) 富岳(額面)
阿部親呢	出山釈迦(聯落) 蓮二燕鳥(半折)
佐々木駒太郎	虎二巨竹(聯落) 梅枝(半折)
高田早苗	古木二鴟鴞(聯落) 普化僧(半折)
神木三郎兵衛	寒山拾得(聯落) 枯木二むく鳥(半折)
大澤楨三	布袋観音(聯落) 蓮(半折)
竹谷兼吉	蘆雁(聯落) 山水(半折)
高橋幸助	壁向達摩 千鳥月出(二葉半折二ツ切)
横田準之助	杜子 瀑布
綾部喜右衛門	張菓良 松二鳩
岩沢虎吉	山水(聯落) 柳下牛(半折)
山崎豊	鯉瀑昇(聯落) 蘆雁
井上力	虎(聯落) 竹二鷺(半折)
前野真太郎	蓮二小鳥(半折) 芙蓉嶽(割)
綾部清兵衛	蓮二鷺(聯落) ふどう二栗鼠(半折)
沼田治兵衛	楊柳観音(聯落) 虹二かがり(割)

作品購入者は20名、48点であった。

(注) 聯落は4尺5寸×1尺6寸か1尺7寸(約136cm×48cm~52cm)くらいまでで、厳格な寸法ではない。

半折は4尺5寸×1尺1寸5分(約136cm×約35cm)、全紙の幅を縦に半分に切ったもので、一般的に最も多く用いられている。

式歩は縦と横の割合で、横に対して縦の寸法が2、3割少ない形のもので、一般的に横物と言っている類である。

この会合を起点として、第1回の川越画宝会主催の橋本雅邦翁絵画展覧会が開催されたのは、明治32年であった。当会は、雅邦が亡くなる1年前の明治40年（1907）まで続いた。

なお、稿を起こすに当たって、青木一好氏、岡田隆男氏、山崎美術館には、特に厚い御協力を戴き、ここに改めて感謝の意を表する次第です。

(筆者は川越市立博物館協議会副会長)



## まんぐり

川越市の北西部、入間川の右岸に広がる上寺山地区には、マンガリと呼ばれる行事が伝承されています。このマンガリは、五色の幣束を挿したボンテンを担いで地区を回り、川で禊をしてから石尊様と呼ばれる石灯籠に奉納するという、近在には見られない珍しい祭りです。天王様の夏祭りとして、悪疫退散や無病息災、家内安全などを祈願して行われています。かつては、曜日に関係なく7月14日でしたが、現在は7月の第2日曜日となっています。昭和47年2月8日には、川越市の無形民俗文化財に指定されました。

このマンガリの歴史について詳しくは不明ですが、次のような伝承が残っています。江戸時代に流行病があった時、困った人々は相州（現神奈川県）の大山へ祈願に行きました。そこで人々は、地元で石尊様を祀ってボンテンを作り、禊をしてからお参りするとよいと教えられました。それ以来、今日に続いているということです。また、マンガリという名称についても定かではありません。神仏に祈願するために水を浴び、体の穢れをとって清浄にする意味を持つ万垢離（まんぐり）がなまったものともいわれています。

さて、各地で行われている様々な伝統行事は、時代の影響を受けながら継承されています。上寺山地区では、平成6年に地区の伝統行事の運営に大きな変化がありました。それまで親年行司・中年行司・小年行司の3つの年行司が中心となり、マンガリを始めとした獅子舞・愛宕様・観音様・地蔵様などの行事を行っていましたが、各行事毎に独立した組織で運営することとなったのです。これを機に、年行司はマンガリに限って運営することとなりました。現在の年行司は、地区内各班から1人を出す取り決めによって18名で務め、この中から長・副・会計それぞれ1人を選出しています。また年行司の引継ぎに関しては、マンガリを行う日に新旧入れ替わることになっています。

マンガリの準備は、年行司の三役が中心となり、前年のマンガリが終わった頃から早くも始まります。使用するボンテンの材料（麦藁や割竹等々）の調達も最近では困難になり、早くから農家の方に依頼しておく必要があるのです。その他にも、警察への道路使用許可申請や土手の草取りなどの様々な裏方の仕事があります。

こうした念入りの準備を経て、祭りの当日を迎えます。かつては時田家に集まって準備をする習慣でしたが、近年では、昼頃から地区公民館に新旧の年行司を中心に人々が集まって支度をします。祭りに欠かせない青竹2本を注連縄で結んだものやフセギの札、そして祭りの中心的な役割を果たすボンテンなどを作ります。

ボンテン作りに関しては、小麦の藁すぐりから始まります。地味ながらも大切で、結構大変な作業です。同時に、五色（赤・白・黄・緑・紫）の四手を割竹に挟んだ幣束も作ります。昔は全戸分を用意しましたが、今は百本程となっています。藁をすぐり終わると、次に藁を束ねて孟宗竹の先に筒状に取り付け、5本の荒縄で縛ります。この藁束は米俵をかたどったものとされています。そして最後に、大天狗（1本）・小天狗（2本）と呼ばれる大振りの幣束を頂上部に立て、周囲には五色の幣束を沢山挿して出来上がりとなります。

全ての支度が整うと、ほら貝・注連縄・ボンテン・人々の順に行列を組み、地区の氏神である八咫神社に向かいます。この時、ボンテンは束ねた方を前にして数人で担ぎます。神社に着くと直会を開き、関係者で飲食を共にします。そして新旧の年行司の紹介、引継ぎなどを行います。

午後4時頃、代表者の祝詞の奏上に続き、地区回りに出発します。先程と同様に行列を組み、今度はボンテンの竹の柄を地面につけて勢い盛んに走ります。今では主要な道路を通るようになっていますが、昔は道々でさんざん練ったものでした。青々とした田んぼの中を通る道すがら、農作業をしている人がいれば、振舞の酒でもてなしたこともあったといえます。このボンテン担ぎの一行は、途中地区の境4か所にフセギの札を立て、地区境を流れる入間川へと向かいます。

雁見橋付近で入間川の中へ入り、祭りはクライマックスを迎えます。ボンテンと注連縄を結んだ青竹を立て、代表者による祝詞の奏上が行われます。そして同行者一同、「悪疫退散」「無病息災」「家内安全」などの祈りをささげて川の水を掛け合い、身を清めます。

終わるとこのボンテンを持ち帰り、八咫神社の一角にある石尊様と呼ばれる石灯籠の傍らに立てて納めます。そしてこの日から1週間、新しい年行司が夕暮れ時になると灯籠に蠟燭の火を灯し、地区の安全を祈ります。こうして一連の行事は終了します。

現在、マンガリは疫病や災い除けの天王様の祭りとして地域に受け継がれています。しかし、祝詞の文言に大山阿夫利神社の名が見えることや、石尊様にボンテンを納めるという行為などから、大山信仰との関連性を窺うことができます。ボンテンを用いた大山信仰に関わる祭りの事例は、幾つか確認することができるため、今後これらとの比較検討が、マンガリの由来や歴史の解明に役立つものと思われる。



石尊様とボンテン

分館だより  
—本丸御殿—

鎧の着装を体験しました。

土曜体験教室「鎧を着てみよう」を、去る5月24日（土）に本丸御殿の中庭において開催しました。当日は、最高の天候の下、'川越藩火縄銃鉄砲隊保存会'の寺田勝廣氏をはじめ会員の方々の御協力をいただき、子どもを中心に鎧の着装を行いました。

参加された方々からは、「鎧を着ることを楽しみに来ました。」「是非とも、子どもに着せてみたくて、や

ってきました。」「1年に1回しかやらないのですか、もっとやってください。」「来年も是非、実施してください。楽しみにしています。」「知らないで、川越に遊びに来たけれど、貴重な体験ができ、これ以上ないお土産ができました。」等、たくさんのうれしいお言葉をいただきました。

この催しは、来年度以降も実施の予定です。御期待ください。

鎧の着装



平成14年度

利用状況

博物館・川越城本丸御殿・川越市蔵造り資料館

博物館・川越城本丸御殿・川越市蔵造り資料館とも、平成14年度中、多くの皆様に御来館いただきまして、誠にありがとうございました。今後も、より多くの方に御満足いただけるよう、常設展示・企画展示の充実を図っていきたく考えています。

皆様の御来館をお待ちしています。

施設区分	年間入館者数	1日平均入館者数	開館日数	
博物館	大人	78,305	396	287
	学生	19,705		
	児童	15,614		
	合計	113,624		
川越城本丸御殿	大人	83,289	366	293
	学生	17,422		
	児童	6,619		
	合計	107,330		
川越市蔵造り資料館	大人	78,499	361	293
	学生	18,248		
	児童	9,012		
	合計	105,759		

## 子ども博物館教室

# 「はにわを作ろう」を実施して ～「踊るはにわ」の作成～



子どもたちの作品例

平成15年5月11日（日）、子どもたち33人の参加により当館体験学習室で実施しました。ここ数年は、「縄文土器を作ろう」を実施してきましたが、今回は、この時期に企画展「はにわは語る」を開催していましたので、埴輪を作ることになりました。

実施に向けて、「川越縄文土器の会」会長の島野氏と相談しながら、計画を練り、準備を進めました。縄文土器の会の方々は土の扱いに慣れていますが、事前に、会で埴輪を試作していただきました。

さて、当日です。歴史の勉強も兼ね、まず、特別展示室で実際の埴輪を見学します。子どもたちは、大きな円筒埴輪、いろいろな動物埴輪、道具の埴輪などがあることに驚いています。ある子どもから、「人物埴輪に付いている毛はかつらなのか地毛なのか」という質問が出ると、近くにいる担当職員が、「人物埴輪で見える毛は、地毛を表現している」と、子どもの興味を引き出しながら答えています。

子どもたちに粘土が渡され、作り方の説明が会の方から一通りなされます。はじめに粘土をいくつかに分けます。つまり、頭を作る部分の粘土、胸や腰を作る粘土、脚を作る粘土などに分けるのです。少し作り上げると、水で溶い

たどろどろの粘土を使って接合していきます。

作り方の要領を得ない子どもたちが、川越縄文土器の会の方々の指導でコツをつかみだし、どんどんと作り上げていきます。完成した後、立体になって立ち上がってくれるか、心配です。そのうちに、ロケットのような埴輪がそこかしこで出来上がってきます。さらに子どもたちは、腕や鼻を作って接合し、目や口をくりぬきます。最後に埴輪の表面を木口でなでると、本当の埴輪のようになり、「なるほど」と感心します。立派な「踊る埴輪」の出来上がりです。



はにわ制作状況 1



はにわ制作状況 2

(担当 教育普及係)

# Information

平成15年度の行事として予定しています。

## 講) 座) ・ 教) 室) e) t) c).

行 事	日 程	行 事	日 程
子ども博物館教室 「川越城の探検」	7/19、20	野外博物館教室 「川越の石仏を訪ねて」	10/26
夏休み子ども体験	7/30 8/6、7、8	子ども博物館教室 「蔵造り探検」	11/1、2
昔の遊び	8/2、3	民俗芸能実演 「南田島の足踊り」	11/3
ミュージアムシアター	8/16、17	博物館歴史講座 「歴史の道探訪—鎌倉への道Ⅱ」	11/5、12、19
土器作り講座	9/6、7	古文書講座 「初めての古文書Ⅱ」	11/9、16、 23、29
博物館歴史講座 「歴史の道探訪—舟運Ⅱ」	9/14、20、21	博物館文化祭 —同好会作品の展示—	11/29～12/7
野外博物館教室 「蔵造りウォッチング」	9/28	ミュージアムコンサート	11/30
博物館歴史講座 考古学入門 —縄文の世界への旅—	10/3、10、17	野外博物館教室 「地域の文化財めぐり 南古谷編」	12/6
野外博物館教室 「看板建築の見方・楽しみ方」	10/12		

\*変更の可能性もあります。申込方法も含め、詳細については、「広報川越」を御覧ください。お問い合わせは、博物館まで。

### 土 曜 日 体 験 教 室

毎月、第2土曜日・第4土曜日に開催しています。  
博物館に遊びに来てください。

- 場所 川越市立博物館
  - 時間 午前10時～11時30分と  
午後1時30分～3時30分
- ※詳細は当館にお問い合わせください。

平成15年 7/12	あいぞめをしよう (C)	7/26	和紙を作ろう (C)
8/9	和紙を作ろう (C)	8/23	竹とんぼ・紙とんぼを作ろう (A)
9/13	竹とんぼ・紙とんぼを作ろう (A)	9/27	切紙・折り紙を楽しもう (A)
10/11	埼玉大学の新企画 (A)	10/25	埼玉大学の新企画 (A)
11/8	わら縄作りをしよう (A)	11/22	影絵劇を楽しもう (B)
12/13	火おこしに挑戦しよう (A)	12/20	お正月飾りを作ってみよう (A)

- (A) …… ●申し込みは不要です。当日、直接博物館へお越しください。  
●参加のための入館は無料です。
- (B) …… ●事前に電話かファクスでの申し込みが必要です。  
●参加のための入館は無料です。
- (C) …… ●事前に電話かファクスでの申し込みが必要です。  
●参加のための入館は無料ですが、材料費をいただきます。

# 第13回収蔵品展 暮らしの中の映画

平成15年7月19日(土)～9月7日(日)



特別展示室  
の  
観

博物館では、川越市やその周辺地域の方から寄贈された資料を数多く収蔵しています。これらの資料を有効活用するため、毎年収蔵品展を開催して広く公開する機会を設けています。

今回は、寄贈された資料のうち映画のポスター・チラシなど映画に関係した資料を展示します。また、併せて川越の映画館の変遷も、チラシなどの資料でたどる予定です。

皆様の御来館をお待ちしています。

## 第22回企画展「和算—江戸時代の数学」(仮題)

会期：平成15年10月4日(土)～11月9日(日)

江戸時代に日本で発達した数学を和算といいます。市内には、和算家が数学の問題を解いて神社に奉納した額が5面残されています。この企画展では、残されている和算書や算額などから、地域における和算の浸透を探ります。

### 利用の御案内

#### ◆入館料

区分	博物館	川越城 本丸御殿	川越市 蔵造り資料館	共通入館(観覧)券		
				博物館 美術館	博物館・本丸御殿 蔵造り資料館	博物館・本丸御殿 蔵造り資料館・美術館
一般	200円 (160円)	100円 (80円)	100円 (80円)	300円	300円	450円
大学生 高校生	100円 (80円)	50円 (40円)	50円 (40円)	150円	150円	220円

●( ) 内料金は、団体〔20名以上、1名につき〕の場合。

◆開館時間 午前9時から午後5時まで(ただし入館は4時30分まで)

◆休館日 月曜日(休日は除く)、毎月第4金曜日(休日は除く)、  
休日の翌日(土・日曜日は除く)、年末年始(12/28～1/4)、  
館内消毒(6月下旬)、特別整理期間(12月中旬予定)

●開館時間・休館日は、博物館・川越城本丸御殿・川越市蔵造り資料館とも同様。  
(館内消毒・特別整理期間は、博物館のみ休館)

#### 交通案内

東武東上線・JR川越線 川越駅より  
または西武新宿線 本川越駅より  
東武バス 「札の辻」下車徒歩8分  
・御来館の際は、なるべく電車・バス  
を御利用下さい。

発行日 平成15年7月15日

発行 川越市立博物館

〒350-0053 川越市郭町2丁目30番地1 ☎ 049-222-5399

FAX 049-222-5396

Eメール hakubutsukan@city.kawagoe.saitama.jp

http://www6.ocn.ne.jp/~kawahaku/

R100

古紙配合率100%再生紙を使用しています